

審査の結果の要旨

氏名 山崎寛恵

本論文は、Gibson, J. J. の生態学的アプローチの「身体」と「環境」の二つの概念を検討し、その意義を乳児運動発達の事例分析から明らかにすることを目的としている。序章では、これまでの身体論が中枢制御論であり、また感覚受容刺激に基づく知覚論が、刺激の環境への対応付けをしていないと指摘している。

身体を論じた第 I 部 2 章では、制御を自律的な創発とする共同 synergy や協調 coordination の概念と対比して、Gibson 理論の特徴が、環境と相補的な知覚系を身体構成単位としたこと、行為を、地面に定位する基礎的的定位系に入れ子化 nesting する、視覚系など複数の知覚系の包摂的な組織であるとした点にあるとしている。

3 章ではリーチングの実験研究の展望の後に事例の分析を行っている。1 児のビデオ記録から、リーチング開始期の 5 から 8 ヶ月齢の「うつぶせのリーチング」8 場面の縦断的な分析の結果は、うつぶせのリーチングでは、初期に、上肢が対象物への視覚的的定位を維持するための「上体の支持」と「物への手伸ばし」を同時に担うこと、次いで左右の上肢にこの二機能の分担が生じること、さらにハイハイの出現時には上肢が再び支持と到達を同時に行うことを示していた。到達成功率も合わせた考察では、リーチング時の横揺れ、転倒などの不安定性が、乳児に身体各部の再組織化を探ることを導き、そこから新しい姿勢の入れ子化が生じる可能性があるとしている。

環境を論じた第 II 部 4 章は、生態学的アプローチに影響した理論を検討し、Brunswik, E. が近位(感覚)刺激と遠位対象の蓋然的な連関に知覚の妥当性を求めたこと、また Heider, F. は、元来が混合物である「媒質(空気)」によっては、構成要素が一体な「事物」を特定することはできないと論じたとしている。これに対し媒質中の照明が、周囲の環境面の配置を特定するとした Gibson 視覚論は、移動によって生ずる光配列の流動に、環境面の配置の意味(アフォーダンス)を直接知覚できるとすることで、行為発達を導く情報としての環境面の動的幾何学(生態幾何学)の意義を示唆したとしている。

5 章では生態幾何学による乳児のつかまり立ち開始期の分析を試みている。1 児の 8 ヶ月齢からハイハイ開始までの 10 場面のつかまり立ちの軌道を、利用した屋内環境面の配置と一体に記述し、垂直方向面への上肢の接触、四肢それぞれの経路や立位後の姿勢の分析から、軌道が滑らかではなく、面の配置の知覚が行為の持続を補償していることを指摘している。さらに、つかまり立ちは、静的立位の獲得にとどまらず、現在は遮蔽されている向こう側を視覚的に予期する探索的な移動でもあると考察している。

終章では得られた事例から、本論文が検討した概念を再吟味し、残された課題を論じている。

本論文は、生態学的アプローチの二つの概念の成立を扱い、そこで得られた知見を 1 名の事例ながらも乳児の縦断的事例データの分析と統合することを試みている。初期運動発達を検討する新しい理論的観点と分析の枠組みを提案しており、成果はこの領域へのオリジナルな貢献であると評価された。よって、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。